

平成 31 年度研究プロジェクト研究活動報告

研究種別	■自主研究 6	公益目的事業 17
主査名	金 利昭 茨城大学工学部教授	
研究テーマ	移動の意味に関する総合的研究	
研究の目的： 自動運転や MaaS など最先端技術を用いた新しい交通サービスが現実味を帯びてきている。一方で、これまでにないこれらの革新的な交通サービスを、人々がどのように使いこなしていけばよいのかについては全く不明であり、今まさに各方面で実用的研究開発がなされているところである。しかしバラ色の社会を夢見て実用化を急ぐだけでよいのかという疑問もある。移動は人間にとって根元的な欲求である。子供にとっては遊び・運動・冒険・社会学習であり、大人にとっては気分転換・情報収集、高齢者にとっては健康維持・社会参加の場であろう。このような移動の意味的側面すなわち移動することによる人間の精神的・身体的利点、あるいは交通の社会文化的側面を無視して将来社会を構想することは、非人間的な都市社会を生み出す危険があるのではないか。 本研究では、近年出現した自動運転を含めて移動の文化的・意味的な側面を考察するとともに、これまでの研究で蓄積された移動の意味に関する知見を総合的に整理して体系化するための理論を検討する。		
研究の経過（4 月～3 月）： (1) 2016～2018 年にかけて「個人の思い出と理想を用いた個人の理想都市・生活者像に関する調査」を実施している。この調査の目的は、アンケート調査とワークショップを組み合わせた少人数の詳細な調査により、自身の理想都市像をはっきり描出できない個人が、自身の思い出と理想を用いて、明確・具体的な理想都市像を描出し、従来の手法では抽出されない本質的潜在ニーズを探ることである。36 人のアンケート調査票に記載された記述データと WS での録音データをデータ化し、読み解きを行った。 (2) 移動の意味に関する知見を総合的に整理・考察して体系化するための理論的枠組みを検討し、これまでに得ている移動の個人的側面と社会的側面に関わる知見を位置づけた。		
研究の成果（自己評価含む）： 1) 「理想都市・生活者像に関する調査」の読み解きの結果、以下がわかった。①自動運転が普及すること自体に抵抗を感じている人は少ない。②公共交通の自動化・無料化が望まれている。③自動運転車で通勤し、自動運転車内で酒を飲んだり仕事の確認をしたり自分の時間として有効活用するという期待がある。④一方で都市内を徒歩だけで生活したい、緑や水辺がある道や自然公園で散歩したいというニーズもある。 2) 人・組織・社会・世界の全体像をより正確につかむフレームワークとして近年登場した「インテグラル理論」の四象限（心理的現象、行動的現象、文化的現象、社会システムの現象）に、移動の個人的側面である「意味的利点」「経験の影響」「思い出・理想」と社会的側面である「交通手段の優先順位」「規則・マナー」「理想社会」を位置づけた。		
今後の課題： 自動運転や MaaS による移動の文化的・意味的な側面、個人的・社会的影響を明らかにするための調査・分析が残されている。		